

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520154

研究課題名(和文) 演劇・映画を通して表出されるアボリジニのアイデンティティ

研究課題名(英文) The Australian Aboriginal identity represented in theatre and film

研究代表者

澤田 敬司 (Sawada, Keiji)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：50247269

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、アボリジニ演劇・映画の中に映し出されるアイデンティティを明らかにすることであった。劇評などの資料の分析に加えて、いくつかのアボリジニ戯曲を日本語に翻訳して、日本で上演し、日本の演劇人や観客や、関連するシンポジウムに参加した先住民アーティストたちの反応を取材しながら、その作品が何を表現しようとしたのかを明らかにした。またアボリジニ映画史を整理し、アボリジニの映画監督が取り組んできた主題を明らかにした。これらの成果を、著書、論文、講演、シンポジウム、商業的な雑誌などで発表した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to clarify "Aboriginality" (Aboriginal identity) reflected in Australian indigenous theatre and film. I made clear what kind of identity indigenous artists tried to express, not only by investigating written materials including reviews and criticisms, but also by producing some indigenous plays as professional stages in Japan and interviewing Japanese theatre practitioners and audience members, and indigenous artists who attended at symposiums and talks after the shows. Besides, my research investigated Australian indigenous film history and made clear some subjects Aboriginal filmmakers dealt with. Most findings of my research were made public through books, essays, lectures, symposiums, and commercial journals and booklets.

研究分野：芸術学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：アボリジニ 先住民 オーストラリア 演劇

1. 研究開始当初の背景

(1)国内におけるアボリジニ研究は、文化人類学によってリードされてきたが、伝統的な生活様式やその現代へ適応についての研究が中心であり、芸術や表象について扱われることはこれまであまり無かった。伝統を色濃く保存するノーザンテリトリーなどのアボリジニが、伝統的な表現様式を用いて描く樹皮画や、編み物などについての研究は存在する。しかし、制作者の芸術家、表現者としての主体にまで踏み込んだ研究は皆無である。その結果、当伝統的な表現を大きく逸脱し、また伝統的にアボリジニが持っていなかった表現媒体を用いて表現される芸術作品や芸術家には、関心が払われてこなかった。

(2)演劇学・映画学の分野においても、アボリジニの自己表象に関する芸術は、ほぼ手つかずの領域であった。演劇学・映画学の分野では、旧植民地で生まれたがゆえに「キャンオン」からはずされてきた作品群への関心は高まったはずだが、オーストラリア先住民の演劇作品、映画作品に関する論考は少なかった。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、オーストラリア先住民アボリジニの表現者たちが現代において、かれらが伝統の中で持ってこなかった演劇・映画・メディアアートなどの媒体を用いた表現によって、いかに自らを表象し、アボリジナリティの概念を作品の中に投影させているかを明らかにするものであった。

(2)申請者は研究開始時まで、台頭しつつある若い世代のアボリジニ演劇人と、日本の演劇人との共同舞台制作に、翻訳者・ドラマト

ウルクとして参加し、実践を行いながらそれらの演劇交流のインターカルチュラリズムの諸相について研究を行ってきた。その研究成果を踏まえ、本研究では、舞台あるいは映像というメディアを駆使し表現を続けるアボリジニ芸術家たちの作品世界と彼らの目指すものを分析し、総体としてのアボリジニ演劇、アボリジニ映画の特色を浮かび上がらせることを目指した。

3. 研究の方法

(1)各表現者がその表現媒体を用いている文脈を分析した上で、各作品を読み解く。その時に最も中心となるのは、彼らの「アボリジニナリティ」が、作品の中にどのような影響を及ぼしているのか（あるいはいないのか）についての議論である。具体的には、各アボリジニ表現者たちの作品、来歴に関する文献資料の収集・分析を行う。映画監督については、映像資料の収集・分析を行う。

(2)いくつかの代表的なアボリジニ戯曲の日本上演を実現させ、実際の舞台に対するフィールドワークを通して作品分析を行う。日本の観客に作品が与えるインパクトについても、この時にアンケートを実施することで集約し、分析する。

4. 研究成果

(1)アボリジニ劇団の制作過程・運営に関する実地調査：

ウェスタンオーストラリア州パースに所在する先住民劇団イラ・ヤーキンに赴き、2011年パース国際芸術祭で初演される先住民ミュージカル『ウィラーラ』の制作プロセスについてフィールドワークを行った。特に先住民

劇作家(デヴィッド・ミルロイ)、演出家(ウェズリー・イノック)、主演俳優(アーニー・デインゴ)、劇団イラ・ヤーキン幹部らに取材を行った。先住民系演劇人たちの芸術的方向性や作品の制作手法、劇団の運営に関する貴重な証言を得ることが出来た。先住民劇団の運営者などに対する聞き取り調査は、国内外の研究でも珍しく、先住民演劇を運営面から見直す重要な資料となった。

(2)豪・日・加・先住民現代パフォーマンスの比較調査：

アボリジニの現代パフォーマンス実践を、カナダ、日本という別の地域の先住民パフォーマンスと比較研究した。具体的には、2011年に日本で行われたアイヌ音楽と北米先住民コンテンポラリーダンスのコラボレーション公演『ススリウカ』をフィールドワークし、振付家、公演主催者に取材を行った。また、シンポジウム開催によって、先住民の表現における伝統と現代性の問題について、理論的検討を行った。さらに、同時期に上演された先住民マルチメディアパフォーマンス『ロング・スキン』を現地で取材し、『ススリウカ』と比較検討することで、グローバルに活躍する先住民芸術家の共通性と、方向性の相違について分析を行った。この成果は、よりグローバルな文脈に位置づけるため、日本カナダ学会において研究発表した。このような、複数の国の先住民パフォーマンスの比較研究は、国内外でほとんど見られないものであり、ユニークな成果を得ることが出来た。

(3)『ナパジ・ナパジ』の日本における受容研究：

スコット・ランキン+トレヴァー・ジェイ

ミソンによる『ナパジ・ナパジ』は、1950,60年代にオーストラリアの砂漠地帯で行われた英国の核実験によって離散した先住民ビジャンジャラの人々の歴史と今を描いた作品の、上演実践とフィールドワークによる研究を行った。研究代表者の翻訳により、日本で初めて当該作品を上演し、さらに二度のシンポジウムで、来日した作者スコット・ランキンとともに、この作品が成立した背景や意義についての発表を行った。この作品研究では、日本上演という要素によって、作品に本来盛り込まれてはいなかった福島原発事故の問題を、日本の観客が読み取るという、クロスカルチュラルな現象が観察され、本国オーストラリアでも存在しない、ユニークな研究成果となった。

(4)オーストラリア戯曲のアボリジナリティとハイブリディティについての分析：

ジョン・ロメルル作『ミス・タナカ』に関して、上演実践とフィールドワークによる研究を行った。オーストラリアにおける、先住民アボリジニと、日系移民、アジア太平洋諸島出身の交流を描いた作品である。この作品をオーストラリア学会全国研究大会と早稲田大学演劇博物館 GCGE の共催によって、研究代表者の翻訳により上演を行った。また、作品背景・意義に関して、招聘した作者ジョン・ロメルルや、文化人類学者を交えて同学会にてシンポジウムを行った。さらに翌年には、江戸系あやつり人形劇団・結城座によるプロフェッショナル上演も実現させ、その際、先住民パフォーマーも招聘し、上演後のシンポジウムも開催した。劇作家や演出家、出演者へのインタビューなどフィールドワークを行い、アボリジナリティ(と日本人性)におけ

るハイブリディティの問題など、興味深い現象を観察することが出来、本国オーストラリアでも存在しない、ユニークな研究成果となった。

(5)先住民ミュージカルのテーマに関する調査：

オーストラリア先住民演劇の中でも、特にミュージカルのジャンルで重要な作品、トニー・ブリッグズ作の『ザ・サファイアーズ』について、実践的調査を伴った研究を行った。まず予備調査として、収集した文献を用いて、作品のバックグラウンドになっているヴィクトリア州・ニューサウスウェールズ州境のクメラグンジャ居留地と、ヨルタ・ヨルタの人々の歴史と文化、彼らのアイデンティティと芸術・エンターテインメントとの関わりについて明らかにした。その上で、研究代表者の翻訳により、日本で初めてとなる上演を行った。公演に伴って、『歌うこと、芝居をすることの意味：『ザ・サファイアーズ』のバックグラウンド』と題して講演を行い、その内容は今後論文化の予定である。また、予備調査の内容は、講演「オーストラリアのミュージカルへの招待（日豪合同セミナー）の中で公表した。さらに、オーストラリア本国で映画化された映画版 The Sapphires（邦題『ソウルガールズ』）が、舞台版の日本初演と同時期に日本公開されたのに併せて、映画の一般観客に向けて、前述の調査内容を元にした論考を劇場用冊子に寄稿し、社会への幅広い公開を行った。

(6)先住民映画史における他者表象・自己表象の変容：

人類学者による学術的記録映像から始まって、今日の先住民自身による監督作品に至る

まで、アボリジニと映画の関わりの歴史を調査した上で、映画史上の主要な映画作品に見られるアボリジニの自己表象の変容について分析を行った。本論考は、アボリジニを学際的に論じた論文集『アボリジニ学と日本』に収録され、国内では初めての本格的なアボリジニ映画史の論文となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

佐和田(澤田)敬司、「マラリングからヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマへ：豪先住民演劇『Ngapartji Ngapartji (ナパジ・ナパジ)』は日本でどう観られたか」『人文論集』51号 査読無 pp.39-56. 2013年

佐和田(澤田)敬司、「『ミス・タナカ』の作品・翻訳・上演をめぐる諸問題について」『豪日交流基金助成 オーストラリア学会主催：オーストラリア公開講座講演録』 査読無 pp.5-15. 2012年

佐和田(澤田)敬司、「オーストラリア演劇：新しい劇作家の台頭」『国際演劇年鑑』 pp.102-107. 2012年

Keiji Sawada, "The presentation of Australian indigenous plays in Japan", Double Dialogues, Issue Fourteen, Summer 2011(Web Journal)
http://www.doubledialogues.com/issue_fourteen/Keiji.html

〔学会発表〕(計8件)

佐和田(澤田)敬司、「『ナパジ・ナパジ』と現代オーストラリア演劇～核・民族・ストーリーテリング」世田谷パブリックシアター+国際演劇協会 2013年11月13日(招待講

演)

佐和田(澤田)敬司、「オーストラリア演劇
~先住民文化と現代演劇の出会い」世田谷パ
ブリックシアター+国際演劇協会 2013年)3
月26日(招待講演)

佐和田(澤田)敬司、「演じることと先住民」
日本カナダ学会 2011年9月12日

Keiji Sawada, "Ngapartji Ngapartji: An
Australian Indigenous Plays Evoking
Memories of Maralinga, Hiroshima, Nagasaki,
and Fukushima", The University of Sydney,
International Symposium "Looking back on
the Asia-Pacific War: Art, Cinema and
Media" 5 November 2012. (招待講演)

〔図書〕(計7件)

山内由理子編、佐和田(澤田)敬司、「アボ
リジニと映画：民族誌の記録から文化の祝福
へ」『オーストラリア先住民学と日本』御茶ノ
水書房 2014年6月刊行予定

佐和田(澤田)敬司、ジョン・ロメリル、
『オーストラリア演劇叢書12 ミス・タナカ
ノ心中-ラブ・スーサイズ』オセアニア出版
社、2012年9月、総ページ182頁

スコット・ランキン、佐和田(澤田)敬司、
『ITI 紛争地域から生まれた演劇その3
「動乱と演劇」ドラマ・リーディング上演台
本』国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センタ
ー、pp.55-86, 2012年3月

早稲田大学オーストラリア研究所編、佐和
田(澤田)敬司、「先住民のパフォーマンスと
グローバルな文化混濁：チューキー・ダンサ
ーズ『Ngurrumilmarrmiriyu(ロング・スキン)』」
『世界の中のオーストラリア』オセアニア出
版社、pp.207-226, 2012年

Keiji Sawada, et al."Hybridity and

interculturalism in Australia-Japan
theatrical exchanges" Outside Asia:
Japanese and Australian Identities &
Encounters in Flux, Japanese Studies
Centre, Monash University, pp.151-166,
2011.

〔その他〕

佐和田(澤田)敬司訳、ウェズリー・イノ
ック『BLACK MEDEA: 黒い王女メデア』(劇
団アングルスによる上演)2014年2月

佐和田(澤田)敬司訳、トニー・ブリッグ
ズ『ザ・サファイアーズ』(早稲田大学演劇舞
台芸術副専攻+早稲田大学演劇博物館による
上演)2013年12月

佐和田(澤田)敬司訳、ジョン・ロメリル
『ミス・タナカ』(江戸糸あやつり人形・結城
座による上演)2012年9月

佐和田(澤田)敬司訳、ジェイミソン+ラ
ンキン『ナバジ・ナバジ』(文化庁+ユネスコ
国際演劇協会・日本センターによる上演)2011
年12月

佐和田(澤田)敬司訳、ジョン・ロメリル
『ミス・タナカ』(オーストラリア学会+早稲
田大学演劇博物館グローバルCOEによる上演)
2011年6月

6. 研究組織

研究代表者

澤田 敬司(SAWADA, Keiji)

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号: 50247269